<table>
<tr><td>Ｎｏ．</td><td>１</td><td rowspan="4">Ｎｏ　Ｉｍａｇｅ</td></tr>
<tr><td>学区</td><td>瀬田南学区</td></tr>
<tr><td>主な相手先</td><td>瀬田南歴史文化研究会　ほか</td></tr>
<tr><td>日時</td><td>２０１９年３月１４日（木曜）</td></tr>
<tr><td>概要</td><td colspan="2">・瀬田南学区で大きな活動と言えば、船幸祭であるが、もともとは春の例祭のほうが由緒ある祭礼である
・春の例祭では、建部大社から神輿が出る。昔は、瀬田の唐橋まで行って、氏子域になる唐橋の東詰めのあたりを回っていたが、今は担ぎ手がおらず、建部大社から中ノ島間を往復するだけになった
・建部大社の祭礼は、「氏子」、「座」という地元住民による組織で行われる。「座」の方が古くからの組織で、「座」だけでは祭礼が維持できなくなってきたことから、「氏子」が作られたと聞く
・「座」である家の住民は、祭礼では大きな役目を与えられ、船幸祭などの祭礼では先頭を馬に乗って歩くなどをした。今は、馬に乗ることはなくなったが、今でも「座」が大きな役目を担う
・「座」は、春の例祭や船幸祭だけでなく、それぞれの「座」が担当する別の祭礼もある
・「座」は一族の主家が世襲してきた。分家の人間は絶対に「座」になることはできないものであったが、「座」も段々脱退する人や主家ではなく分家の人間が引き継ぐようなことになってきた
・昔は、春の例祭も船幸祭も神輿の渡御が途中で休憩したりしながら進んだので非常にゆっくりであったが、今はすぐ行って、すぐ帰るような状態になっていて、少しさびしくなっている
・昔は、船幸祭の当日の前に宵宮があり、「座」の子ども達が舞を奉納したりする行事をしていたが、今はなくなっている
・船幸祭は、春の例祭に比べると歴史は浅いが、私（８０代）が子どもの頃には行っていたので、５０年は経っている
・船幸祭では、神輿を運ぶ船を曳いたり、神主や関係者を乗せる船を運航したりするのに、漁業組合の力が必須になる
・船幸祭では、神輿を船に乗せ、南郷にある御旅所まで行って帰ってくる。春の例祭では、中ノ島にある御旅所まで行って帰ってくる
・建部大社は広大な寺領を今も有しており、三大寺のあたりは今も建部大社の土地であって、そこの借地料が大きな財源になっていると聞く。そのおかげで、「座」、「氏子」に大きな財政負担がなくても立派な祭礼が行えていると聞く
・船幸祭のときは、沿道の住民が提灯を立てたり、幕を張ったりする
・船幸祭のときは、瀬田川の両岸で焚き木に火が灯される。焚き木は建部大社が用意しているようだが、火を灯し、それを設置するのは地元住民の協力で成り立っている</td></tr>
</table>

	・船幸祭の中で、雅楽が演奏される。昔は、地元の人たちで行っていたが、今は月輪から来てもらっている。式次第や演奏目録のようなものは建部大社に保管されていると思う ・船幸祭では、次代の担ぎ手を育成するため、中学生ぐらいを対象にした軽い神輿を２，３年前に作った。まずは軽い神輿を担いで、大きくなったら本物を担ぐという流れができることを目指している ・建部大社には毛知比神社と新茂智神社という末社がある ・唐橋の東詰めは、昔は非常に栄えた商店街であった。田上、大石、石山からたくさん買い物客が来ていたと聞く。それを象徴するのが、瀬田の商店街には、お風呂屋、油屋など各種が２店ずつあった。通常の商店街では商店街内に１種１店が通常なのに、２店ずつあったというのは、それでも商売が成り立っていたという証拠 ・唐橋の東詰めは、漁業の町で、今も狭い道が残っているなどその名残が残っている ・主に獲っていたのは、セタシジミ。昔は、一回の漁で１５キロぐらい獲れていたが、今は１～２キロ ・セタシジミの貝殻は、昔は、焼き場があり、そこで粉々に砕き、粉末にして京都などで売っていたようだ。おしろい、漆喰、舗装の材料、ニワトリのえさなどの用途で使われていたと聞く ・セタシジミは長い竿で湖底をさらう漁法で収穫しており、今もその漁法が残っている。東海道五十三次の絵の中に、その光景と瀬田の唐橋を描いた絵があったのではなかったか ・漁業者と建部大社の関係は深く、昔からセタシジミやモロコなどの水産物を奉納していたと。江戸時代には燈籠を奉納したという記録も残っていて、今もその燈籠が残っていると聞く。燈籠を奉納したとき、燈籠を燈すための大量の油も奉納したとの記録も残っている ・セタシジミが獲れなくなったのは、琵琶湖総合開発が発端。南郷洗堰も原因の一つ。昔は、唐橋周辺は遠浅で、川岸に船を陸揚げさせていたり、子どもが船の傍で米粒だけで魚を釣ったり、唐橋から水中に飛び込んだりして遊んでいた。しかし、それらのおかげで水深が深くなり、流れもなくなったことで、川底にはヘドロが溜まり、セタシジミが住みにくい環境になってしまった ・南郷洗堰には、川に流れが生まれるように、少しでも放流する状態にしてもらうよう以前から要望しているが、対応してもらえない ・この周辺でも今もウナギ屋が残っているが、昔はウナギやモロコなどおいしい魚がたくさん獲れた ・漁業組合の倉庫が瀬田川岸にあり、その建物が５０年以上前に建てられたと思う。琵琶湖総合開発のときに港ができて、そのときに建てられたものと思う ・東海道沿道の町家は独特で、土地の形が、間口が狭く、街道側から母屋、中庭、蔵が続き、土地の形が縦長になっている ・唐橋の東詰めには代官所があり、膳所藩から代官が来ていた。礒田家がその家系

	にあたる。礒田家の蔵には、当時の書物などが残っているのではないかと思うが、調査・研究はしていないようだ ・唐橋の東詰めには、町中に地蔵がたくさん祀ってある。これは、昔疫病が流行ったときに、平癒の祈願で琵琶湖に流されたたくさんの地蔵を瀬田の漁師が気の毒に思い、拾って安置したと聞く ・唐橋の東詰めにある雲住寺は創建から６００年ほどであり、比較的新しい。昔は、ここに唐橋の東端があり、そこから堂上遺跡の南端を通り街道が走っていたようだ ・唐橋の東詰めの地域でのほかの祭礼というと、雲住寺のそばにある龍王宮に関わる祭礼がある。この周辺の人は建部大社と龍王宮双方の氏子で、両方にお宮参りしていた ・唐橋の東詰めの地域は大火に備え、町内の代表者が愛宕神社にお参りし、お守りを持ち帰ってきた。町中には随所に愛宕神社のお守りを祀る祠が建っている ・唐橋の東詰めには「エンコ」と呼ばれる湧き水が出る井戸がある。昔、三洋があったときに、水量が減ったが、三洋がなくなったら、水量が増えたと言われている。昔からの住宅地にも残っているし、今のフレンドマートの傍にできた新興住宅地にも昔ながらの井戸が復活されていて、誰でも見ることができる ・漁業組合では、セタシジミの復活を目指し、滋賀県の水産センターと協力して、セタシジミの栄養源になるプランクトンの研究をしている。そのほか、シジミ祭りを開催し、シジミ獲り体験、ペーロン、シジミ飯の試食などを行っているが、この祭りは昭和５９年からである ・シジミの復活を祈願して、河川沿いにある４つのお寺で毎年順番に彼岸供養を行っている ・和船競争という大会も開いており、昔は、ＪＲの高架橋から石山寺のほうまでをコースにしていたが、今はＪＲの高架橋から唐橋までのコースに規模を縮小し開催している。これは昭和２０年ぐらいからはじめたと聞く